

平成29年度 伊勢原市野球協会学童審判部講習会 <座学>

－野球規則の凡例－

- ・文中【付記】【規則説明】【原注】【例外】とあるのは、米国オフィシャル・ベースボール・ルールズに付された説明または運用上の解釈をいう。
- ・文中【注】とあるのは、編者が必要と認めた説明または運用上の解釈をいう。
- ・条項右に記す〈 〉で囲んである部分は、2015年度の条項を示す。
- ・規則本文および【原注】【注】の中、《新》が付されている全文および《 》で囲んでいる部分は、いずれも2017年度において改正された箇所を示す。

1. 2017年度 野球規則改正（抜粋）

(I) 3.07 (a) の前段および同【注】を次のように改める。

投手のグラブは、縁取りを除き白色、灰色以外のものでなければならない。  
審判員の判断によるが、どんな方法であっても幻惑させるものであってはならない。

【注】アマチュア野球では、投手のグラブについては、縁取り、しめひも、縫い糸を除くクラブ本体（捕球面、背面、網）は1色でなければならない。

(II) 5.06 (b) (3) (C) および同【原注】を次のように改める。（下線部を改正）

野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの箇所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。

【原注】野手が正規の捕球をした後、ボールデッドの箇所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなり、各走者は野手がボールデッドの箇所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。

(III) 5.09 (b) (9) 【原注】を追加する。

【原注】後位の走者の行動または前位の走者の行動によって、後位の走者は前位の走者に先んじたとみなされる場合がある。

例=1 アウト走者二・三塁のとき、三塁走者（前位の走者）が本塁へ進塁しようとして三塁本塁間のランダウンプレイとなつた。二塁走者（後位の走者）は前位の走者がタッグアウトになると想い、三塁に進んだ。三塁走者は触球されずに、三塁へ戻り、左翼方向に塁を踏み超えてしまつた。このとき、後位の走者は、前位の走者の行動によって前位の走者に先んじたことになる。結果として後位はアウトとなり、三塁は占有されていないことになる。前位の走者が三塁を放棄してアウトと宣告されていない限り、前位の走者はアウトになる前に三塁を占有する権利がある。5.06  
(a) (1) 参照

(IV) 6.01 (j) および同【注】を追加する。

(j) 併殺を試みる塁へのスライディング

走者が併殺を成立させないために、“正しいスライディング”をせずに、野手に接触したり、接触しようすれば、本条によりインターフェアとなる。

本条における“正しいスライディング”とは、次のとおりである。走者が、

- (1) ベースに到達する前からスライディングを始め（先に地面に触れる）、
- (2) 手や足でベースに到達しようとし、
- (3) スライディング終了後は（本塁を除き）ベース上にとどまろうとし、
- (4) 野手に接触しようとして走路を変更することなく、ベースに達するように滑り込む。

“正しいスライディング”をした走者は、そのスライディングで野手に接触したとしても、本条によりインターフェアとはならない。また、走者の正規の走路に野手が入ってきたために、走者が野手に接触したとしてもインターフェアにはならない。

前記にかかわらず、走者がロールブロックをしたり、意図的に野手の膝や送球する腕、上半身より高く足を上げて野手に接触したり、接触しようすれば、“正しいスライディング”とはならない。

走者が本項に違反したと審判員が判断した場合は、走者と打者走者にアウトを宣告する。その走者がすでにアウトになっている場合については、守備側がプレイを試みようとしている走者にアウトが宣告される。

【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

## 2. 神奈川県学童ルール改正

### (I) 背番号

- ① 背番号は 0番～99番（監督、コーチ使用の28、29、30を除く）を使用することができる。
- ② メンバー表は必ず背番号順で記入すること。

### (II) スパイク

同一チーム内にて、スパイクの色を揃える規定を廃止する。

### (III) サングラス

監督、コーチ、選手いずれもサングラス（ミラータイプを含みスポーツサングラスに限る）の使用を可とする。

監督、コーチ、その他の大人は、ベンチ内では外すこと。但し病気、疾病によりサングラスが必要な場合は認められるが、必ず申し出ること。（帽子つば上にかけることも禁止）

## 3. 野球規則の説明

[P22]

### 5.02 守備位置

試合開始のとき、または試合中ボールインプレイになるときは、捕手を除くすべての野手はフェア地域にいなければならぬ。

- (a) 捕手は、ホームプレートの直後に位置しなければならない。

故意の四球が企図された場合は、ボールが投手の手を離れるまで、捕手はその両足をキャッチャースポックス内に置いていなければならないが、その他の場合は、捕球またはプレイのためならいつでもその位置を離れてもよい。

ペナルティー ボークとなる。（6.02a12 参照）

- (b) 投手は、打者に投球するにあたって、正規の投球姿勢をとらなければならない。
- (c) 投手と捕手を除く各野手はフェア地域ならばどこに位置してもさしつかえない。

【注】投手が打者に投球する前に、捕手以外の野手がファウル地域に位置を占めることは本条で禁止されているが、これに違反した場合のペナルティはない。

審判員がこのような事態を発見した場合には、速やかに警告してフェア地域に戻らせた上、競技を続行しなければならないが、もし警告の余裕がなくそのままプレイが行われた場合でも、この反則行為があったからといってすべての行為を無効としないでその反則行為によって守備側が利益を得たと認められたときだけ、そのプレイは無効とする。

[P23]

### 5.03 ベースコーチ

- (a) 攻撃側チームは攻撃期間中、2人のベースコーチ=1人は一塁近く、他は三塁近く=を所定の位置につかせなければならない。

- (b) ベースコーチは各チーム特に指定された 2 人に限られ、次のことを守らなければならない。
- (1) そのチームのユニフォームを着ること。
  - (2) 常にコーチスボックス内にとどまること。

ペナルティ 審判員は本項に違反した者を試合から除き、競技場から退かせる。

【5.03 原注】ここ数年、ほとんどのコーチが片足をコーチスボックスの外に出したり、ラインをまたいで立ったり、コーチスボックスのラインの外側に僅かに出ていることは、ありふれたことになっているが、コーチは、打球が自分の通過するまで、コーチスボックスを出て本塁寄りおよびフェア地域寄りに立っていてはならない。ただし、相手チームの監督が異議を申し出ない限り、コーチスボックスの外に出ているものとはみなされない。しかし、相手チーム監督の申し入れがあつたら、審判員は、規則を厳しく適用し、両チームのコーチがすべて常にコーチスボックス内にとどまることを要求しなければならない。

コーチが、プレーヤーに「滑れ」「進め」「戻れ」とシグナルを送るためにコーチスボックスを離れて、自分の受け持ちのベースで指図することもありふれたことになっている。このような行為はプレイを妨げない限り許される。

【注1】監督が指定されたコーチに代わって、ベースコーチとなることはさしつかえない。

【注2】アマチュア野球では、ベースコーチを必ずしも特定の 2 人に限る必要はない。

【注3】コーチがプレイの妨げにならない範囲で、コーチスボックスを離れて指図することは許されるが、たとえば三塁コーチが本塁付近にまできて、得点しようとする走者に対して「滑れ」とシグナルを送るようなことは許されない。

[P30]

## 5.05 打者が走者となる場合

- (b) 打者は、次の場合走者となり、アウトにされることなく、安全に一塁が与えられる。(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする)
- (3) 捕手またはその他の野手が、打者を妨害（インターフェア）した場合。

しかし、妨害にもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側チームの監督は、そのプレイが終わってからただちに妨害行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。

ただし妨害にもかかわらず、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも 1 個の塁を進んだときは妨害とは関係なくプレイは続けられる。

[P34]

## 5.06 走者

### (b) 進塁

(3) 次の場合、打者を除く各走者は、アウトにされることなく1個の塁が与えられる。

(C) 野手が飛球を捕えた後、《ボールデッドの箇所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。》

【原注】野手が正規の捕球をした後、《ボールデッドの箇所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。》ボールデッドとなり、各走者は野手が《ボールデッドの箇所に入ったとき》の占有権から1個の進塁が許される。

(D) 走者が盗塁を企てたとき、打者が捕手またはその他の野手に妨害（インターフェア）された場合。

【原注】本項は、盗塁を企てた塁に走者がいない場合とか、進もうとした塁に走者がいても、その走者もともに盗塁を企てていたために次塁への盗塁が許される場合だけに適用される。しかし、進もうとした塁に走者があり、しかもその走者が盗塁を企てていない場合には、たとえ盗塁行為があつてもその走者の進塁は許されない。また、単に塁を離れていた程度では本項は適用されない。

[P42]

## 5.07 投手

### (a) 正規の投球姿勢

投球姿勢にはワインドアップポジションとセットポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも隨時用いることができる。

投手は投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。

【原注】投手がサインを見終わってから投手板を外すことはさしつかえないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は審判員によってクイックピッチと判断される。投手は投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。

投手がサインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。

#### (1) ワインドアップポジション

投手は打者に面して立ち、その軸足は投手板に触れて置き、他の足の置き場所には制限がない。この姿勢から、投手は、

① 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中途で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

② 実際に投球するときを除いて、どちらの足も地面から上げてはならない。ただし、実際に投球するときは自由な足（軸足でない足）を1歩後方に引き、さらに一步前方に踏み出すこともできる。

投手が軸足を投手板に触れて置き(他の足はフリー)、ボールを両手で身体の前方に保持すれば、  
ワインドアップポジションをとったものとみなされる。

【原注 1】ワインドアップポジションにおいては、投手は軸足でない足(自由な足)を投手板の上か、  
前方か、後方かまたは側方に置くことが許される。

【原注 2】(1) 項の姿勢から、投手は、

- ① 打者に投球してもよい。
- ② 走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球してもよい。
- ③ 投手板を外してもよい。(ボールを両手で保持した投手は、投手板を外したら必ず両手を身  
体の両側に下ろさなければならない) 投手板をはずしたときには最初に軸足から外さなけ  
ればならない。  
また前記の姿勢から、セットポジションに移つたり、ストレッチをすることは許されない。  
=違反すればボーグとなる。

【注 1】アマチュア野球では、投手の軸足及び自由な足に関し、次のとおりとする。

- ① 投手は打者に面して立ち、その軸足は投手板に触れて置き、他の足の置き場には制限がない。  
ただし、他の足を投手板から離して置くときは、足全体を投手板の前縁の延長線より前に置  
くことはできない。
- ② 投手が①のように足を置いてボールを両手で身体の前方に保持すれば、ワインドアップポジ  
ションをとったものとみなされる。

【注 2】投手が投球に関連する動作をして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること  
以外は許されない。したがって走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、  
投手板を外すこともできない。違反すればボーグとなる。

## (2) セットポジション

投手が打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手  
で身体の前方で保持して、完全に動作を静止したとき、セットポジションをとったとみなされ  
る。

この姿勢から、投手は、

- ① 打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方(後方に限る)に外してもよい。
- ② 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中途で止めたり、変更したりしないでその投  
球を完了しなければならない。

セットポジションをとるに際して“ストレッチ”として知られている準備動作(ストレッチ  
とは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)を行うことができる。しかし、ひとた  
びストレッチを行ったならば、打者に投球する前に、必ずセットポジションをとらなければな  
らない。

投手はストレッチに続いて投球する前には(a)ボールを両手で身体の前方で保持し、(b)  
完全に静止しなければならない。審判員はこれを厳重に監視しなければならない。投手は、し  
ばしば走者を塁に釘付けにしようと規則破りを企てる。投手が“完全な静止”を怠った場合に

は、審判員は、ただちにボーグを宣告しなければならない。

【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。

しかしながら、投手が打者のすきをついて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボーグが宣告される。6.02 (a) (5) [原注] 参照

【注1】《アマチュア野球では、》本項【原注】の前段は適用しない。

【注2】(1) (2) 項でいう“途中で止めたり、変更したり”とはワインドアップポジションおよびセットポジションにおいて、投手が投球動作中に、故意に一時停止したり、投球動作をスムーズに行わずに、ことさらに段階をつけるモーションをしたり、手足をぶらぶらさせて投球することである。

【注3】投手がセットポジションをとるにあたっては、投手板を踏んだ後投球するまでに、必ずボールを両手で保持したことを明らかにしなければならない。その保持に際しては、身体の前面ならば、その保持した箇所を移動させてはならず。完全に身体の動作を停止して、首以外はどこでも動かしてはならない。

【注4】セットポジションからの投球に際して、自由な足は、

- ① 投手板の真横に踏み出さない限り、前方ならどの方向に踏み出しても自由である。
- ② ワインドアップポジションの場合のように、1歩後方に引き、そして更に1歩踏み出すことは許されない。

【注5】投手は走者が塁にいるとき、セットポジションをとってからでも、プレイの目的のためなら、自由に投手板を外すことができる。この場合、軸足は必ず投手板の後方に外さなければならず、側方または前方に外することは許されない。投手が投手板を外せば、打者への投球はできないが、走者のいる塁には、ステップをせずにスナップだけで送球することも、また送球のまねをすることも許される。

【注6】ワインドアップポジションとセットポジションとの区別なく、軸足を投手板に触れてボールを両手で保持した投手が、投手板から軸足を外すにあたっては、必ずボールを両手で保持したまま外さねばならない。また、軸足を投手板から外した後には、必ず両手を離して身体の両側に下ろし、あらためて軸足を投手板に触れなければならない。

【問】投手がストレッチを行ってからセットポジションをとるまでに、両手を顔の前で接触させ、そのまま下ろし、胸の前でボールを保持した。ボーグになるか。

【答】たとえ顔の前で両手を接触させても、そのままの連続したモーションで、胸の前に下ろして静止すれば、ボーグにはならない。しかし、いったん顔の前で停止すれば、そこでボールを保持したことになるから、その姿勢から両手を下に下せばボーグとなる。

#### (b) 準備投球

投手は各回のはじめに登板する際、あるいは他の投手を救援する際には、捕手を相手に8球を超えない準備投球をすることが許される。この間プレイは停止される。

各リーグは、その独自の判断で、準備投球の数を8球以下に制限しても差支えない。このような準備投球は、いずれの場合も1分間を超えてはならない。突然の事故のために、ウォームアップをする機会を得ないで登板した投手には、球審は必要と思われる数の投球を許してもよい。

#### (c) 投手の遅延行為

墨に走者がいないとき、投手はボールを受けた後12秒以内に打者に投球しなければならない。投手がこの規則に違反して試合を長引かせた場合には、球審はボールを宣告する。

12秒の計測は、投手がボールを所持し、打者がバッタースポックスに入り、投手に面したときから始まり、ボールが投手の手から離れたときに終わる。

この規則は、無用な試合引き伸ばし行為をやめさせ、試合をスピードアップするために定められたものである。したがって、審判員は次ぎのことを強調し、それにもかかわらず、投手の明らかな引き伸ばし行為があったときには、遅滞なく球審はボールを宣告する。

- (1) 投球を受けた捕手は、速やかに投手に返球すること。
- (2) また、これを受けた投手は、ただちに投手板を踏んで、投球位置につくこと。

#### (d) 墓に送球

投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への投球に関連する動作を起こすまでなら、いつでも墓に送球することができるが、それに先立つて、送球しようとする墓の方向へ、直接踏み出すことが必要である。

【原注】投手は送球の前には、必ず足を踏み出さなければならない。スナップスロー（手首だけで送球すること）の後で、墨に向かって踏み出すようなことをすればボークとなる。

【注】投手が投手板を外さずに一墨へ送球する場合、投手板上で軸足が踏みかわっても、その動作が一挙動であればさしつかえない。しかし、送球前に軸足を投手板の上でいったん踏みかえた後に送球すれば、軸足の投手板上の移行としてボークとなる。

#### (e) 軸足を外したとき

投手がその軸足を投手板の後方に外したときは、内野手としてみなされる。しかがって、その後、墨に送球したボールが悪送球となつた場合には、他の内野手による悪送球と同様に取り扱われる。

【原注】投手は、投手板を離れているときならば、意のままに走者のいる墨ならどの墨に送球してもよいが、もしその送球が悪送球となれば、その送球は内野手の送球とみなされ、その後の処置は、野手の送球に関する規則が適用される。(5.06 b 4 G)

#### (f) 両手投げ投手

投手は、球審、打者および走者に、投手板に触れる際、どちらの手にクラブをはめることで、投球する手を明らかにしなければならない。

投手は、打者がアウトになるか走者になるか、攻守交代になるか、打者に代打者が出るか、あるいは投手が負傷するまでは、投球する手を変えることはできない。投手が負傷したために、同一打者の打撃中に投球する手を変えれば、その投手は以降再び投球する手を変えることはできない。投手が投球する手を変えたときには、準備投球は認められない。

投球する手の変更は、球審にはっきりと示さなければならない。

## 5.08 得点の記録

[P48]

- (b) 正式試合の最終回の裏、または延長回の裏、満塁で、打者が四球、死球、その他のプレイで一塁を与えられたために走者となつたので、《打者とすべての走者が次の塁に進まねばならぬなり三塁走者が》得点すれば勝利を決する1点となる場合には、球審は《三塁》走者が本塁に触れるとともに、打者が一塁に触れるまで、試合の終了を宣告してはならない。

[P52]

## 5.09 アウト

- (a) 打者アウト

(1) フェア飛球またはファウル飛球(ファウルチップを除く)が、野手に正規に捕えられた場合。

【原注1】野手は捕球するためにダッグアウトの中に手を差し伸べることはできるが、足を踏み込むことはできない。野手がボールを確捕すれば、それは正規の捕球となる。ダッグアウトまたはボールデッドの箇所(たとえばスタンド)に近づいてファウル飛球を捕えるためには、野手はグラウンド(ダッグアウトの縁を含む)上または上方に片足または両足を置いておかなければならず、またいすれの足もダッグアウトの中またはボールデッドの箇所の中に置いてはならない。正規の捕球の後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの箇所に《踏み込んだり、倒れこんだ場合、ボールデッドとなる。》走者については5.06(b)(3)(C)

[原注] 参照。

捕球とは、野手が、インフライトの打球、投球または送球を、手またはグラブでしっかりと受け止め、かつそれを確実につかむ行為であつて、帽子、プロテクター、あるいはユニフォームのポケットまたは他の部分で受け止めた場合は、捕球とはならない。

また、ボールに触れると同時に、あるいはその直後に、他のプレーヤーや壁と衝突したり、倒れた結果、落球した場合は“捕球”ではない。

野手が飛球に触れ、そのボールが攻撃側チームのメンバーまたは審判員に当たった後に、いすれの野手がこれを捕えても“捕球”とはならない。

野手がボールを受け止めた後、これに続く送球動作に移ってからボールを落とした場合は、“捕球”と判定される。

要するに、野手がボールを手にした後、ボールを確実につかみ、かつ意識してボールを手放したところが明らかであれば、これを落とした場合でも“捕球”と判定される。

【原注2】野手がボールを地面に触れる前に捕えれば、正規の捕球となる。その間。ジャッグルしたり、あるいは他の野手に触れることがあってもさしつかえない。

走者はフェンス、手すり、ロープなど、グラウンドと観覧席との境界線を越えた上空へ身体を伸ばして飛球を捕えることは許される。また野手は、手すりの頂上やファウルグラウンドに置いてあるキャンバスの上に飛び乗って飛球を捕えることも許される。しかし野手が、フェンス、手すり、ロープなどを超えた上空やスタンドへ、身体を伸ばして飛球を捕えようすることは、危険を承知で行うプレイだから、たとえ観客にその捕球を妨げられても、観

客の妨害行為に対してはなんら規則上の効力は発生しない。

ダッグアウトの縁で飛球を捕えようとする野手が、中へ落ちないように、中にいるプレーヤー（いずれのチームかを問わない）によって身体を支えられながら捕球した場合、正規の捕球となる。

【注】捕手が、身につけているマスク、プロテクターなどに触れてからはね返ったフライボールを地面に取り落とさず捕らえれば、正規の“捕球”となる（ファウルチップについては定義34参照）。ただし、手またはミット以外のもの、たとえばプロテクターあるいはマスクも用いて捕えられたものは、正規の捕球とはならない。

（2）第3ストライクと宣告された投球を、捕手が正規に捕球した場合。

【原注】“正規の捕球”ということは、まだ地面に触れていないボールが、捕手のミットに中に入っているという意味である。ボールが、捕手の着衣または用具に止まつた場合は、正規の捕球ではない。また、球審に触れてはね返つたボールを捕られた場合も同様である。

チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに触れてから、身体または用具に当たつて跳ね返つたのを、捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、ストライクであり、第3ストライクにあたるときには、打者はアウトである。また、チップしたボールが最初に捕手の手またはミットに当たつておれば、捕手が身体または用具に手またはミットをかぶせるように捕球することも許される。

[P54]

（8）打者が打つかバントしたフェアの打球にフェア地域内でバットが再び当たった場合。

ボールデッドとなって、走者進塁は認められない。

これに反して、フェアの打球が転がってきて、打者が落としたバットにフェア地域内で触れた場合は、ボールインプレイである。ただし、打者が打球の進路を妨害するためにバットを置いたのではないと審判員が判断したときに限られる。

打者がバッタースボックス内にいて、打球の進路を妨害しようとする意図がなかったと審判員が判断すれば、打者の所持するバットに再び当たった打球はファウルボールとなる。

【原注】バットの折れた部分がフェア地域に飛び、これに打球が当たったとき、またはバットの折れた部分が走者または野手に当たったときは、プレイはそのまま続けられ、妨害は宣告されない。打球がバットの折れた部分にファウル地域で当たったときは、ファウルボールである。

バット全体がフェア地域またはファウル地域に飛んで、プレイを企てている野手（打球を処理しようとしている野手だけでなく、送球を受けようとしている野手も含む）を妨害したときは、故意であったか否かの区分なく妨害が宣告される。

打撃用ヘルメットに偶然、打球がフェア地域で当たるか、または送球が当たったときは、ボールインプレイの状態が続く。

打球がファウル地域で打撃用ヘルメット、地面以外の異物に触れたときは、ファウルボールとなり、ボールデッドとなる。

走者がヘルメットを落としたり、ボールに投げつけて打球または送球を妨害しようとする意図があったと審判員が判断したときには、その走者はアウトになりボールデッドとなって、他の走者は打球に対してのときは投手の投球当時占有していた塁、送球に対してのときは妨害発生の瞬間に占有していた塁に帰らなければならない。

【注】本項前段を適用するに当たっては、バッターがバットを所持していたかどうかを問わない。

(b) 走者アウト

[P58]

(3) 走者が、送球を故意に妨げた場合または打球を処理しようとしている野手の妨げになった場合。

ペナルティ 走者は、アウトとなり、ボールデッドとなる。(6.01a インターフェアに対するペナルティ) 参照。

【注1】 “野手が打球を処理する”とは、野手が打球に対して守備しはじめてから打球をつかんで送球し終わるまでの行為をいう。したがって、走者が前記のどの守備行為でも妨害すれば、打球を処理しようとしている野手を妨げたことになる。

【注2】 走者が 5.09 (a) (11), 5.09 (b) (1) 項規定の走路を走っていた場合でも、打球を処理しようとしている野手の妨げになったと審判員が判断したときには、本項の適用を受けて走者はアウトになる。

(c) アピールプレイ

[P67]

(4) 走者が本塁に触れず、しかも本塁に触れ直そうとしないとき、本塁に触球された場合。

(5.09b12 参照)

本項規定のアピールは、投手が打者への次の1球を投じるまで、また、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てるまでに行わなければならない。

イニングの表または裏が終わったときのアピールは、守備側チームのプレーヤーが競技場をさるまでに行わなければならない。

アピールは、その消滅の基準となるプレイまたはプレイの企てとみなさない。

投手がアピールのために塁へ送球し、スタンドの中などボールデッドの箇所にボールを投げ込んだ場合には、同一走者に対して、同一塁についてのアピールを再びすることは許されない。

第3アウトが成立した後、ほかにアピールがあり、審判員が、そのアピールを支持した場合は、そのアピールアウトが、そのイニングにおける第3アウトとなる。

また、第3アウトがアピールによって成立した後でも、守備側チームは、このアウトよりも他に有利なアピールプレイがあれば、その有利となるアピールアウトを選んで、先の第3アウトと置きかえることができる。

“守備側チームのプレーヤーが競技場を去る”とあるのは、投手および内野手がベンチまたはクラブハウスに向かうために、フェア地域を離れたことを意味する。

## 5.10 プレーヤーの交代

[P70]

- (a) プレーヤーの交代は、試合中ボールデッドのときなら、いつでも許される。代って出場したプレーヤーは、そのチームの打撃順に従って、退いたプレーヤーの順番を受け継いで打つ。

[P96]

## 6.02 投手の反則行為

- (a) ボーク

塁に走者がいるときは、次の場合ボークとなる。

(1) 投手板に触れている投手が投球に関連する動作を起こしながら投球を中止した場合。

【原注】左投げ、右投げ、いずれの投手でも、自由な足を振って投手板の後縁を越えたら、打者へ投球しなければならない。ただし、二塁走者のピックオフプレイのために二塁へ送球することは許される。

(2) 投手板に触れている投手が、一塁または三塁に送球するまねだけして、実際に送球しなかった場合。

【注】投手が投手板に触れているとき、走者のいる二塁へは、その塁の方向に直接ステップすれば儀投してもよいが、一塁または三塁と打者への偽投は許されない。投手が軸足を投手板の後方へ外せば走者のいるどの塁へもステップしないで偽投してもよいが、打者だけは許されない。

(3) 投手板に触れている投手が、塁に送球する前に、足を直接その塁の方向に踏み出さなかつた場合。

【原注】投手板に触れている投手は、塁に送球する前には直接その塁の方向に自由な足を踏み出すことが要求されている。投手が実際に踏み出さないで、自由な足の向きを変えたり、ちょっと上に上げて回したり、または踏み出す前に身体の向きを変えて送球した場合、ボークである。投手は、塁に送球する前に塁の方向へ直接踏み出さなければならず、踏み出したら送球しなければならない。(二塁については例外)

走者一・二塁のとき、投手が走者を三塁に戻すために三塁へ踏み出したが実際に送球しなかつたら(軸足は投手板に触れたまま)、ボークとなる。

(4) 投手板に触れている投手が、走者のいない塁へ送球したり、送球するまねをした場合。  
ただし、プレイの必要があれば差し支えない。

【原注】投手が走者のいない塁へ送球したり、送球するまねをした場合、審判員は、それが必要なプレイかどうかを、走者がその塁に進もうとしたか、あるいはその意図が見られたかで判断する。

【問】走者一塁のとき、走者のいない二塁に送球したり、または送球するまねをしたらボークか。

【答】ボークである。しかし一塁走者が二塁に盗塁しようとしたのを防ぐ目的で、第1動作で二塁の方向に正しく自由な足を踏み出せば、ボークにならない。なお、投手が投手板を正規に外せば、

ステップをしないで送球してもかまわない。

(5) 投手が反則投球をした場合。

【原注】クイックピッチは反則投球である。打者が打者席内でまだ十分な構えをしていないとき投球された場合には、審判員は、その投球をクイックピッチと判定する。塁に走者がいればボーグとなり、いなければボールである。クイックピッチは危険なので許してはならない。

(6) 投手が打者に正対しないうちに投球した場合。

(7) 投手が投手板に触れないで、投球に関連する動作をした場合。

【問】走者一塁のとき、投手が投手板をまたいだままストレッチを始めたがボールを落とした。ボーグとなるか。

【答】投手が投手板に触れないで、投球に関連する動作を起こしているからボーグとなる。

(8) 投手が不必要に試合を遅延させた場合。

【原注】本項は、6.02 (c) (8) により警告を発せられたときは、適用されない。投手が遅延行為を繰り返して 6.02 (c) (8) により試合から除かれた場合には、あわせて本項のボーグも課せられる。5.07 (c) は、塁に走者がいないときだけ適用される。

(9) 投手がボールを持たないで、投手板に立つか、これをまたいで立つか、あるいは投手板を離れていて投球するまねをした場合。

(10) 投手が正規の投球姿勢をとった後、実際に投球するか、塁に送球する場合を除いて、ボールから一方の手を離した場合。

(11) 投手板に触れている投手が、故意であろうと偶然であろうと、ボールを落とした場合。

(12) 故意四球が企図されたときに、投手がキャッチャースボックスの外にいるキャッチャーに投球した場合。

【注】“キャッチャースボックスの外にいる捕手”とは、捕手がキャッチャースボックス内に両足を入れていないことをいう。したがって故意四球が企図されたときに限って、ボールが投手の手を離れないうちに捕手が片足でもボックスの外に出しておれば、本項が適用される。

(13) 投手がセットポジションから投球するに際して、完全に静止しないで投球した場合。

ペナルティ (a) 項各規定によってボーグが宣告されたときは、ボールデッドとなり、各走者はアウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。

ただし、ボーグにもかかわらず、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、かつ、他のすべての走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、このペナルティの前段を

適用しないで、プレイはボーグと関係なく続けられる。

【規則説明1】投手がボーグをして、しかも塁または本塁に悪送球（投球を含む）した場合、塁上の走者はボーグによって与えられる塁よりもさらに余分の塁へアウトを賭して進塁してもよい。

【規則説明2】(a) 項ペナルティを適用するに際して、走者が進塁しようとする最初の塁を空過し、アピールによってアウトを宣告されても、1個の塁を進んだものと解する。

【注】前掲【規則説明1】の“悪送球”には、投手の悪送球だけでなく、投手からの送球を止め損じた野手のミスプレイも含まれる。走者が投手の悪送球または野手のミスプレイによって余塁が奪えそうな状態となり、ボーグによって与えられる塁を越えて余分に進もうとしたときには、ボーグと関係なくプレイは続けられる。

【6.02a 原注】ボーグルールの目的は、投手が走者を意図的に騙そうとするのを防ぐためであることを審判員は心に銘記しなくてはならない。もし、審判員の判断で投手の“意図”に疑いを抱いたら、審判員は厳重に規則を適用すべきである。

[P100]

(b) 反則投球

塁に走者がいないときに、投手が反則投球をした場合には、その投球にはボールが宣告される。ただし、打者が安打、失策、四球、死球その他で一塁に達した場合は除く。

【原注】投球動作中に、投手の手から飛び出したボールがファウルラインを超えたときだけボールと宣告されるが、その他の場合は投球とみなされない。塁に打者がいればボールが投手の手から落ちたときただちにボーグとなる。

【注】球審は、反則投球に対してボーグを宣告したならば、それが反則投球によるものであることをピッチャーに指摘する。

なお、6.02(c)(6)に違反した場合には、6.02(d)を適用する。

[P100]

(c) 投手の禁止事項

投手は次のことを禁じられる。

(1) 投手が投手板を囲む18フィートの円い場所の中で、投球する手を口または唇につけた後にボールに触れるか、投手板に触れているときに投球する手を口または唇につけること。

投手は、ボールまたは投手板に触れる前に、投球する手の指をきれいに拭かなければならぬ。

【例外】天候が寒い日の試合開始前に、両チーム監督の同意があれば、審判員は、投手が手に息を吹きかけることを認めることができる。

ペナルティ 投手が本項に違反した場合には、球審はただちにボールを交換させ、投手に警告を発する。投手がさらに違反した場合には、ボールを宣告する。その宣告にもかかわらず、投手が投球して打者が安打、失策、死球、その他で一塁に達し、かつ走者が次塁に達するか、または元の塁にとどまっていた（次塁に達するまでにアウトにならなかった）ときには、本項の違反とは関係なくプレイは続けられる。なお、違反を繰り返した投手は

リーグ会長から罰金が科せられる。

- (2) ボール、投球する手またはグラブに唾液をつけること。
- (3) ボールをグラブ、身体、着衣で摩擦すること。
- (4) ボールに異物をつけること。
- (5) どんな方法であっても、ボールに傷をつけること。
- (6) (2)～(5)で規定されている方法で傷つけたボール、いわゆるシャインボール、スピットボール、マッドボールあるいはエメリーボールを投球すること。  
ただし、投手は素手でボールを摩擦することは許される。

【注】シャインボール＝ボールを摩擦してすべすべにしたもの。

スピットボール＝ボールに唾液を塗ったもの。

マッドボール＝ボールに泥をなすりつけたもの。

エメリーボール＝ボールをサンドペーパーでザラザラにしたもの。

なお、ボールに息を吹きかけることも禁じられている。

- (7) 投手がいかなる異物でも、身体につけたり、所持すること。

【原注】投手は、いずれの手、指または手首に何もつけてはならない(たとえば、救急ばんそうこう、テープ、瞬間接着剤、プレスレットなど)。審判員が異物と判断するかしないか、いずれの場合も、手、指または手首に何かをつけて投球することを許してはならない。

【注】我が国では、本項【原注】については、所属する団体の規定に従う。

- (8) 打者がバッタースポックスにいるときに、捕手以外の野手に送球して故意に試合を遅延させること。ただし、走者をアウトにしようと企てる場合は除く。  
ペナルティ 審判員は1度警告を発し、しかもなお、このような遅延行為が繰り返されたときには、そのピッチャーを試合から除く。

【注1】 投手が捕手のサインを投手板から離れて受けるので、しばしば試合を遅延させている。これは悪い習慣であるから、監督及びコーチはこれを是正するように努めなければならない。

【注2】 アマチュア野球では、本項ペナルティの後段を適用せず、このような遅延行為が繰り返されたときは、ボールを宣告する。

- (9) 打者を狙って投球すること。このような反則行為が起きたと審判員が判断したときは、審判員は次のうちの何れかを選ぶことができる。
  - (A) その投手またはその投手とそのチームの監督とを試合から除く。
  - (B) その投手と両チームの監督に、再びこのような投球が行われたら、その投手(またはその投手の後に登場した投手)と監督を退場させる旨の警告を発する。

審判員は、反則行為が起きそうな状況であると判断したときは、試合開始前あるいは試合中を問わず、いつでも両チームに警告を発することができる。

リーグ会長は、8.04に規定された権限によって、制裁を加えることができる。

【原注】打者を狙って投球することは、非スポーツマン的である。特に頭を狙って投球することは、非常に危険であり、この行為は許されるべきではない。審判員はちゅうちょなく本項を厳格に適用しなければならない。

[P103]

- (d) ペナルティ 投手が (C) 項 (2) ~ (7) に違反した場合、球審は次のような処置をしなければならない。
- (1) 投手はただちに試合から除かれ、自動的に出場停止となる。マイナーリーグでは、自動的に 10 試合の出場停止となる。
  - (2) 球審が違反をしたにもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側の監督は、そのプレイが終わってからただちにそのプレイを生かす旨、球審に通告することができる。ただし、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が次塁に達するか、元の塁にとどまっていた（次塁に達するまでにアウトにならなかった）ときには、反則とは関係なくプレイは続けられる。
  - (3) (2) 項の場合でも、投手の反則行為は消滅せず、(1) 項のペナルティは適用される。
  - (4) 攻撃側の監督がそのプレイを生かすことを選択しなかった場合は、球審は走者がいなければボールを宣告し、走者がいればバークとなる。
  - (5) 投手が各項に違反したかどうかについては、審判員が唯一の決定者である。

【6. 02d 原注 1】投手が (c) 項 (2) または (3) に違反しても、その投球を変化させる意図はなかったと球審が判断した場合は、本項のペナルティを適用せずに警告を発することができる。しかし、投手が違反を繰り返せば、球審はその投手にペナルティを科さなければならない。

【6. 02d 原注 2】ロジンバッグにボールが触れたときは、どんなときでもボールインプレイである。雨天の場合または競技場が湿っている場合には、審判員は投手にロジンバッグを腰のポケットに入れるよう指示する。（1 個のロジンバッグを交互に使用させる）  
投手はこのロジンバッグを用いて、素手にロジンをつけることを許されるが、投手、野手を問わず、プレーヤーはロジンバッグで、ボールまたはグラブにロジンをふりかけたり、またはユニフォームのどの部分にも、これをふりかけることは許されない。

【注】アマチュア野球では本項ペナルティを適用せず、1 度警告を発した後、なおこのような行為が継続されたときには、その投手を試合から除く。

[P104]

### 6.03 打者の反則行為

#### (a) 打者の反則行為によるアウト

次の場合、打者は反則行為でアウトになる。

- (1) 打者が片足または両足を完全にバッターボックスの外に置いて打った場合。

【原注】本項は、打者が打者席の外に出てバットにボールを当てた（フェアかファウルかを問わない）とき、アウトを宣告されることを述べている。球審は、故意四球が企てられているとき、投球を打とうとする打者の足の位置に特に注意を払わなければならない。打者は打者席から飛び出したり、踏み出して投球を打つことは許されない。

(2) 投手が投球姿勢に入ったとき、打者が一方のバッタースポックスから他方のバッタースポックスに移った場合。

【注】投手が投手板に触れて捕手からのサインを見ているとき、打者が一方から他方のバッタースポックスに移った場合、本項を適用して打者をアウトとする。

(3) 打者がバッタースポックスの外に出るか、あるいは何らかの動作によって本塁での捕手のプレイ及び捕手の守備または送球を妨害した場合。

【注1】打者が空振りしなかったとき、投手の投球を捕手がそらし、そのボールがバッタースポックス内にいる打者の所持するバットに触れた際はボールインプレイである。

【注2】本項は、捕手以外の野手の本塁でのプレイを打者が妨害した場合も含む。

打者に妨害行為があっても、走者を現実にアウトにすることができたときには、打者をそのままとして、その走者のアウトを認め、妨害と関係なくプレイは続けられる。しかしアウトの機会はあっても、野手の失策で走者を生かした場合には、現実にアウトが成立していないから、本項を適用して打者をアウトにする。

なお、捕手からの送球によってランダウンプレイが始まろうとしたら、審判員は直ちに“タイム”を宣告して打者を妨害によるアウトにし、走者を元の塁に戻す。

(4) 《新》走者がいるとき、または投球が第3ストライクのとき、打者がフェア地域またはファウル地域にバットを投げて、投球を受けようとしていた捕手（またはミット）に当たつた場合

【6.03a 3・4 例外】進塁しようとしていた走者がアウトになった場合、および得点しようとした走者が打者の妨害によってアウトの宣告を受けた場合は、打者はアウトにならない。

【6.03a 3・4 原注】打者が捕手を妨害したとき、球審は妨害を宣告しなければならない。打者は、アウトになり、ボールデッドとなる。妨害があったとき、走者は進塁できず、妨害発生時の瞬間に占有していたと審判員が判断した塁に帰らなければならない。しかし、妨害されながらも捕手がプレイをして、アウトにしようとした走者がアウトになった場合には、現実には妨害がなかったものと考えられるべきで、その走者がアウトとなり、打者はアウトにならない。その際、他の走者は、走者がアウトにされたら妨害はなかったものとするという規則によって、進塁も可能である。このような場合、規則違反が宣告されなかつたようにプレイは続けられる。

打者が空振りし、スイングの余勢で、その所持するバットが、捕手または投球に当たつたり、審判員が故意でないと判断した場合は、打者の妨害とはしないが、ボールデッドとして走者の進塁を許さない。打者については第1ストライク、第2ストライクにあたるとき、ただストライクを宣言し、第3ストライクにあたるときに打者をアウトにする。(2ストライク後の“ファウルチップ”も含む)

(5) 打者が、いかなる方法であろうとも、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるように改造、加工したと審判員が判断するバットを使用したり使用しようとした場合。

このようなバットには、詰めものをしたり、表面を平らにしたり、釘を打ち付けたり、中をうつろにしたり、溝を付けたり、パラフィン、ワックスなどでおおって、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるようにしたもののが含まれる。

打者がこのようなバットを使用したために起きた進塁は認められない（バットの使用に起因しない進塁、たとえば盗塁、ボーグ、暴投、捕逸を除く）が、アウトは認められる。

打者はアウトを宣告され、試合から除かれ、後日リーグ会長によってペナルティが科される。

【原注】打者がこのようなバットを持ってバッタースボックスに入れば、打者は規則違反のバットを使用した、あるいは使用しようとしたとみなされる。

【注】アマチュア野球では、このようなバットを使用した場合、打者にはアウトを宣告するにとどめる。

[P111]

#### 6.04 競技中のプレーヤーの禁止事項

(a) 監督、プレーヤー、控えのプレーヤー、コーチ、トレーナー及びバットボーイは、どんなときでも、ベンチ、コーチスポット、その他競技場のどの場所からも、次のことをしてはならない。

- (1) 言葉、サインを用いて、観衆を騒ぎたたせるようにあおったり、あおろうとすること。
- (2) どんな方法であろうとも、相手チームのプレーヤー、審判員または観衆に対して、悪口をいつたりまたは暴言を吐くこと。
- (3) ボールインプレイのときに、“タイム”と叫ぶか、他の言葉または動作で明らかに投手にボーグを行わせようと企てること。
- (4) どんな形であろうとも、審判員に故意に接触すること。（審判員の身体に触れるることはもちろん、審判員に話しかけたり、なれなれしい態度をとること。）

(b) ユニフォーム着用者は、次のことが禁じられる。

- (1) プレーヤーが、試合前、試合中、または試合終了後を問わず、観衆に話しかけたり、席を同じくしたり、スタンドに座ること。
- (2) 監督、コーチまたはプレーヤーが、試合前、試合中を問わず、いかなるときでも観衆に話しかけたり、または相手チームのプレーヤーと親睦的態度をとること。

【注】アマチュア野球では、次の試合に出場するプレーヤーがスタンドで観戦することを特に許す場合もある。

(c) 野手は、打者の目のつくところに位置して、スポーツ精神に反する意図で故意に打者を惑わしてはならない。

ペナルティ 審判員は反則者を試合から除き、競技場から退かせる。なお投手がボーグをしても無効とする。

(d) 監督、プレーヤー、コーチまたはトレーナーは、試合から除かれた場合、直ちに競技場を去り、以後その試合にたずさわってはならない。

試合から除かれた者はクラブハウス内にとどまっているか、ユニフォームを脱いで野球場構内から去るか、あるいはスタンドに座る場合には、自チームのベンチまたはブルペンから離れたところに席をとらなければならない。

【原注】出場停止処分中の監督、コーチ、プレーヤーは、試合中ダッギングアウト、クラブハウス、新聞記者席に入ることはできない。

(e) ベンチにいる者が、審判員の判定に対して激しい不満の態度を示した場合は、審判員は、まず、警告を発し、この警告にもかかわらず、このような行為が継続された場合には、次のペナルティを適用する。

ペナルティ 審判員は、反則者にベンチを退いてクラブハウスに行くことを命ずる。もし、審判員が反則者を指摘することができなければ、控えのプレーヤーを全部ベンチから去らせる。しかし、この場合そのチームの監督には、試合に出場しているプレーヤーと代えるために必要な者だけを競技場に呼び戻す特典が与えられる。

#### 4. 4人制審判メカニクス変更内容

##### [走者一塁]

- ・中堅手より右側の打球を一塁審が追った場合

<PL>

一塁走者のタッグアップおよび打者走者の一塁触塁を確認し、プレイの状況を見ながら本塁での“プレイに備える”。

<1B>

打球を追い、その行方を確認・判定後、“プレイが一段落するまで”その場に留まる。

<2B>

一・二塁間に移動して、一塁走者の二塁触塁を確認し、一・二塁での“プレイに備える”(一塁走者および打者走者の一塁への帰塁プレイを含む)。

<3B>

三塁での“プレイに備える”

##### [走者三塁]

- ・左翼手から右翼手までの打球を二塁審が追った場合

<PL>

本塁での“プレイに備える”

<1B>

内野内に移動または“リミング”によって、打者走者の一塁触塁を確認し、一・二塁での“プレイに備える”。

<2B>

打球を追い、その行方を確認・判定後、“プレイが一段落するまで”その場に留まる。

<3B>

三塁走者のタッグアップを確認し、三塁での“プレイに備える”。

##### —付記—

2アウトの場合、二塁審は無走者のときと同じポジションをとることができる。その場合は、三塁審の責任および動きは、打者走者の二・三塁でのプレイに備えるというふうに変わる。球審は走者がスコアリングポジションにいるので本塁に留まり、一塁審は打者走者の一塁でのプレイだけに責任を持つことになる。

以上